

# 「映画というベッド」2024 01

能登半島の震災は、まだ被害の全貌がワカらず、ただ心配に心配を重ねるばかり…。そんな思いを抱えながら、正月7日、新年最初の上映会が、横浜市の泉公会堂であった。

映画『奈緒ちゃん』シリーズの撮影の舞台、私にとっては言わばホームグラウンドだ。三十年近く前に「奈緒ちゃん」が完成した時、最初の完成上映会をやった場所で、次回作『大好き～奈緒ちゃんとお母さんの50年～』も、5月11日（土）にここでお披露目をする予定だ。

新年早々、満員のお客さんになれば、と願っての上映会でしたが…。

「人数はともかく」いい上映会でした。「人数はともかく」も本当だし、「いい上映会でした」も本当です。

上映のプログラムは『妻の病』『ぴぐれっと』『えんとこの歌』でした。どの作品も、今の時点で観るに相応しい傑作だ！こんなにいい映画を観ない人は損をしている、とつくづく思った。

中でも『えんとこの歌』は、学生時代の友人、主人公の遠藤滋と久しぶりにお喋りした気分になった。

遠藤は生まれながらに脳性マヒの障がいがあり、三十代からの四十年近くをほとんどベッドに寝たきりで、介助の若者たちの力を借りて生き抜き、晩年は歌人として作品を創り続けた。

映画は、“「弱さの力」とはこおいうことだ…”という姿を、遠藤の存在と介助者たちとの関わりを直視して描いている。

遠藤は、ベッドの上で思索を続け、思いを言葉にし続けたすえ、二年前の春、遠くに旅立った…と思い込んでいたのだが、その私の考えはマチガッていたのかも知れないと、今回気付かされた。

実は、遠藤は今も思索を続けている…。映画というベッドに横たわりながら、今も考えに考えを重ねているのだ…。

「生」と「死」という容れ物に分けて、思考停止してしまっている我々の安易な発想を悠々と乗り越えて、遠藤は今も考えることを止めていないのだ。そして、オマエはどう思んだ、と映画を観る私に、我々に、厳しく問いかけているのだ。

相模原の障がい者大量殺傷事件での、「役に立たない障がい者は、生きる意味がない」という主張に、ベッドの上で必死に応えようとして、まだ答えに辿り着けないままだったに違いない。まだまだ考え続けなければ、と思いつつ旅立った遠藤は、その続きを今も考えているのだ。

ずっと考え続けていくつもりなんだ。

次回作『大好き～奈緒ちゃんとお母さんの50年～』は「奈緒ちゃんシリーズ」の続編であると同時に、映画『えんとこの歌』の続編だとも言えるのかも知れない…と唐突に思った。

障がいを持って生まれ、「長くは生きれない…」と言われていた姪っ子の奈緒ちゃんは、お母さんや家族をはじめ、多くの人々の力添えで50歳まで生き、お母さんをはじめ、多くの人々を今も育てている…。

その50年の記録である次回作『大好き』は、『えんとこの歌』という映画のベッドに横たわり今なお考えを深めている遠藤の、不在の「いのち」の有り様と、しっかりシンクロしているように思うんだ。

遠藤は、《だって、君はひとりで勝手に何かをやってゆくことなんて出来ないだろう？》と呟き、

奈緒ちゃんは、《やさしくなあにって、言わなくちゃねえ》と呟く。私は、ただただ二人の存在に耳を澄ます…。

考え続けることを止めないということは、私にとっては映画を創り続ける、ということに他ならない。

まだまだあきらめない。

伊勢 真一